

2025年度
関西学院大学ロースクール
A日程

一般入試（法学未修者）

論文問題

《10:00～11:30》

○開始の指示があるまで内容を見てはいけません。

【論 文 問 題】

問題文を読んで、〔設問 1〕 および〔設問 2〕 に答えなさい。

〔設問 1〕

下線部①「偶然の出来事をめぐって一方では統計学を用いて飼いならそうとする方向性」および下線部②「他方では偶然に満ちた人生にストーリーを与えて意味を探す方向性」とは、それぞれどのようなものか、問題文全体の論旨を踏まえて、説明しなさい。なお、答案中に上記①および②の記号を用いてよい。(300字程度)

〔設問 2〕

問題文の著者は、上記①および②を、それぞれどのように評価しているか、また、両者はどのような関係にあると考えているか、説明しなさい。なお、答案中に上記①および②の記号を用いてよい。(500字程度)

問題文

自然と社会を含む森羅万象が19世紀にいたって数値で測られるようになった。そして、この数値化は、統計学の支配という形を取ってきた。たとえば現在、医療の世界では「エビデンス（根拠）に基づく医療（EBM）」が絶対的な価値を持つ。これは統計学的に病態を分析し、統計学的に有効であると認められた治療法を選択するという営みだ。1991年にカナダの医師ゴードン・ガイアットが提唱した考え方である。

医療のエビデンスにはいくつかのグレードがある。もっとも確度の高いエビデンスは、患者を、ランダムに薬を投与する群と薬を投与しない群というように二つの群に分けて有効性を検討するランダム化比較試験（RCT）を、さらに複数比較し、メタ分析した結果である。RCTの根っこには統計的な妥当性の評価がある。統計的に検討された複数の試験を組み合わせることで、妥当性を上げていく。

エビデンスによって有効な診断方法や治療法が整備されるということには異論がないし、私自身もエビデンスにもとづく医療を選ぶ。しかし病の経験は、エビデンスにもとづく選択だけでは語り切れない。

再発がんが進行しているので「急に具合が悪くなる」可能性があるから、と緩和ケアを探すことを主治医から勧められた哲学者の宮野真生子^{※1}は、エビデンスにもとづく医療において常に問題になるリスクについて次のように述べている。

リスクと可能性によって、[がんが再発した]私の人生はどんどん細分化されていきます。しかも、病と薬を巡るリスクはたくさんありますから、そのなかで、良くない可能性が人生の大半の可能性を占めるように感じ、何も起こらず「普通に生きてゆく」可能性はとても小さくなったような気がしています。（中略）

でも、このリスクと可能性をめぐる感覚はやっぱどこか変なのです。

おかしさの原因は、リスクの語りによって、人生が細分化されていくところにあります。そのとき患者は、いま自分の目の前にいくつもの分岐ルートが示されているように感じます。それぞれのルートに矢印で行き先が書かれていて、患者たちはリスクに基づく良くないルートを避け、「普通に生きていける」ルートを選び、慎重に歩こうとします。

けれど、本当は分岐ルートのどれを選ぼうと、示す矢印の先にたどり着くかどうかはわからないのです。なぜなら、それぞれの分岐ルートが一本道であるはずがなく、どの分岐ルートもそこに入ってしまうと、また複数の分岐があるからです。^{※1}

エビデンスによって有効とされる治療を選ぶプロセスには際限がない。病が進行していくプロセスのなかで、効果が出る確率が高い治療法が選ばれることが多いだろう。

しかし確率が高いといっても「40%の人にはこの治療法が有効であった」という意味であり、残りの60%の患者には効かない。つねに数値をめぐって患者は「効かないかもしれない」と不安な状態に置かれることになる。宮野はこの手紙から半年ほどのちに40代前半で亡くなったが、エビデンスに基づくリスク計算に追われてしまうと、人生の残り時間が確率と不安に支配されるものになってしまうだろう。

科学哲学者のイアン・ハッキング（1936－2023）は、世界そのものが数学化したときに、世界は統計（確率）によって支配されることになったと書いている。

世界が自然法則によって支配されているとみなす決定論的な自然科学の展開のなかで統計学は発達し、社会および人間は統制可能で予測可能なものとなっていく。

アメリカのゴールデンアワーのテレビでは、（中略）露骨な暴力シーンよりも、確率について語られることの方が多いのである。新聞をにぎわせる恐怖が、確率を使って繰り返し語られる。その可能性〔偶然・確率〕**chance**があるのは、メルトダウン、^{がん}癌、強盗、地震、核の冬、エイズ、地球温暖化、その他である。恐怖の対象は（たぶん）これらではなくて、実は確率そのものなのである。（中略）

このような確率の支配は、世界そのものが数学化されたところでのみ起こり得たものである。我々は自然に対して、それがどんなものであり、またどんなものであるべきなのか、根底的には量的な感覚を持っている。これは当たり前のことではなく、いくつかのささいな理由もあってたまたまそうなったのである。^{※2}

統計学が力を持つ現状は、自然と社会のリアリティの^{ありか}在処が具体的な出来事から、数字へと置き換わったことの象徴である。当初、統計は世界のリアリティについてのある程度の傾向を示す指標と見なされていたが、次第に統計が世界の法則そのものであると考えられるようになった。統計は事実に近い近似値ではなく事実そのものの位置を獲得するのだ。先のハッキングはいう。

たとえば1988年、日本が遂に世界一の長寿国になったことが注目を集めた。我々は、ちょうど日本企業が投資のための可処分資本を世界一蓄積しているのと同じくらいリアルに、平均寿命の伸びを日本人の生活や文化の現実的な姿と感じてしまうのである。

このように、「平均寿命」という単なる数字が日本を構成する事実そのものとなる。一人ひとりの日本人は早く亡くなることも長寿のことでもあるのだから、「世界一の長寿国」というラベルが個人の余命を説明するわけではない。ましてや一人ひとりの高齢者が具体的にどのような暮らしをしているのかを示すわけではない。独居なのか、病

院で寝たきりなのか、認知症なのか、もしかしたら元気なのか、同じ90歳でもさまざまだろう。

< 中略 >

科学の世界において、時空間構造はニュートン力学や相対性理論によって説明されてきた。科学において時間は時計で測ることができる均質な数値であり、空間は座標軸上で長さを測定できる数値である。時間も空間も均質に延び^{ひろ}広がっていき、数値の連続的な変化によって時空間構造が描かれ、事物はそのなかの座標軸にマッピングされる。

似たようなかたちで、社会科学では、時間と空間は年表と地図によってマッピングされる。年表はまさに数直線上に出来事を位置づける営みであり、地図は事物や出来事を客観的な平面の広がりの中にマッピングする。

しかしながら、経験の時空間は、座標軸上で位置づけることができないし、外から観察することもできない。経験のリアルがもつ時間と空間は、おそらくは偶然性やリズムという切り口から考えるとわかりやすい。

それは、私たちの経験はつねに偶然にさらされているからである。ものが頭の上に落ちてくるかもしれないし、登校中にばったり別れた恋人に会うかもしれない。そもそも恋に落ちるのは偶然の出会いがきっかけだろう。また、いつどのような病気になるのか、障害をもつのかどうかは予想できないし偶然降ってかかるとしか言いようがない。私自身もたまたまの出会いの積み重ねで今まで様々な研究をする機会に恵まれた。

偶然出会う出来事とともに私たちの人生は作られていく。人間が変化するのは、つねに出合い頭の偶然の出来事、一期一会の偶然の出会い、思わず口に出た偶然の言葉をきっかけにしてであろう。

出来事が起きた日時は年表のどこかにプロットできるが、出来事がなぜそのとき「たまたま」起きたのかという「たまたま性」は、年表には書き込めない。とはいえ「たまたま」はまぎれもなく時間的な経験だ。

近代日本の哲学者である九鬼周造^{く きしゅうぞう}（1888－1941）は、偶然という問題に真正面から取り組んだ数少ない人物である。彼は偶然を、定言的偶然、仮説的偶然、離接的偶然、原始偶然という4種類に分けて議論した。^{※3}

定言的偶然は「法則の裏面に例外としての偶然性」がともなうことである。本書の文脈で考えると、統計的な法則性には収まらない個別性のことを指す。つまり統計的な客観性から私たちの経験はつねに逸脱していく。

仮説的偶然は、「遭遇」のことであり、出会いの偶然性である。もちろんさまざまな因果関係を無限に計算することができるならば、たまたまの出会いは宇宙の物理法則

のなかで必然的に生じたということが出来るかもしれない。しかしそのような計算はまさに「無限」の要素を考慮する必要があるが、それは不可能である。それゆえ出会いは実質的には偶然なのだ。

離接的偶然は、枝分かれの偶然である。「こうなったかもしれないが、そうはならなかった」「この道を選んだが、他の可能性もあった」、そういう偶然である。宮野真生子が複数の選択肢からがんの治療法を選ぶことのいきづまりを語ったときに、念頭に置いていたのはこれである（宮野は九鬼周造の専門家だった）。九鬼はサイコロの6マスの確率を用いて議論している。サイコロを何万回と試してみたら、5のマスが出る確率は限りなく6分の1に近づくだろう。この6分の1という数字が確率である。しかし次の一振りですどのマスが出るのかは、6つの可能性へと枝分かれする偶然なのだ。確率とは人生の偶然を枝分かれに見立てながら多数のサンプルを集めて客観化することで枝分かれの偶然性を飼いならす営みだ。

最後の原始偶然は、世界がそもそも存在するということ、あるいは私がこのような仕方でそもそも存在するという変えようのない事実のことだ。存在の始まりを予想することもできないし、存在の理由を説明することができない「ただ在る」としか言いようがない存在の事実のことである。例外・出会い・枝分かれという偶然は、「在る」という原始偶然に由来すると九鬼は考えていた。

九鬼は、偶然が経験の生々しさに関わると述べている。

芸術が偶然を対象内容とすることを好むというのは、偶然が生命感を伴う事実に基づいていると思う。（中略）自然現象の偶然性は予知し難いもの、法則に捉え得ないものである。そこには個性と自由とが現れている。生命の^{ほうらつ}放埒と恣意の遊戯とが現れている。その生命、その遊戯が美しいのである。その^{はつらつ}潑刺たる逸脱性に対する驚異が感動を与えるのである。

偶然は生命と関わる。法則から逸脱し、奔放な結果を選ぶ。そのような遊びのなかに経験の生命観すなわち生々しさは宿る。

私たちの行動はしばしば突発的なものであり、因果関係では説明できない。予測できない偶然の出来事のもとで、偶然の行動が生まれ、私たちはあと戻りできないしかたで変化する。その理由はしばしばあとづけされ語られる。それゆえに語りは偶然を保存するし、語りのぎくしゃくした表現は経験の生々しさを示す。

さきにあげた、宮野真生子は死のひと月前に、書簡を交わしていた磯野真穂に向けてこう書いている。

なぜ、わたしはそこまでして偶然を問い、語ろうとするのか。ようやくわかった

気がします。そこにこそ「生きている」こと、「生きようとする力」の始まりがあるからです。

（中略）

がんにならずに今日も元気にお酒を飲んでいる可能性もあった。一方にはもちろんがんになる可能性がある。これだけ読むと、私はがんになったという偶然は、サイコロでたまたま6の目がでたような、確率の問題に見えるかもしれません。しかし、もちろんそうではない。

「がんにならずに今日も元気にお酒を飲んでいる可能性もあった。一方にはもちろんがんになる可能性がある」。これは九鬼周造が離接的偶然と呼んだサイコロのように枝分かれする偶然の選択肢だ。しかし宮野は、がんになったということは単なる確率の問題ではないという。つまり枝分かれする離接的偶然ではないという。

重要なのは、「あること」も「ないこと」もありえた「にもかかわらず」、けれど、私はがんになってしまった、ということ。つまり、「にもかかわらず」の反転、逆説こそが、私が乳がんになってしまったというときに偶然として感じる事柄の実体です。

（中略）

私が偶然を問い続け、「にもかかわらずある」を語ろうとするとき、その根っこにあったのは、無に囚われ、必死でそこから抜けようとする生への欲望であり、「にもかかわらずある」と語ることで自らの存在を保とうとする私の執着でした。いま、自らの病を語ろうとするなかでそのおぞましいまでの力を感じます。しかし、これが生きるということであり、そして、私は生きるために言葉を紡ごうとするのです。

ならない可能性もあった「にもかかわらず」がんになったという運命を引き受け、人生と思索が思いがけない変化をとげる。「にもかかわらずある」と語るとき、宮野はたまたま存在していることの不思議と出会っている。これを宮野は「生きようとする力」と呼んでいた。

さまざまな偶然に翻弄されながら、「にもかかわらず」私が「ある」こと、これが私たちの存在の不思議であり、九鬼が原始偶然と呼んだものだ。そして、このような「にもかかわらず」私が「ある」ことのも不思議さが経験の生々しさなのである。人が自分の人生を生きるということは、存在すること自体の偶然性に根っこを持つ。

がんの治療においてはエビデンスに基づく医療に曝^{さら}される、検査結果という客観性をもとに医師が「急に具合が悪くなるかもしれない」と告げた場面から始まる宮野真生子と磯野真穂の往復書簡は、がんという偶然の経験と生きることの不思議を際立たせて肯定することで結末を迎える。偶然は誰かに語ることによってのみ定着される。

友人の磯野に向けて語る（書く）という行為においてのみ、宮野は病の経験そして自分自身の生という偶然について意味を与えることができたはずだ。

とはいえ、科学が偶然性と無縁であるというわけではない。実は客観性や普遍性を謳^{うた}う科学も偶然性と縁が深い。近代の学問は、一見するととりとめなくランダムに生じている偶然の出来事をどのように合理的に理解するのか、という観点から発展してきたとさえ言える。現代医学のスタンダードであるエビデンスにもとづいた医療と呼ばれる標準化をはじめとして、客観性と妥当性を重視する近現代の科学は統計学に依拠している。科学哲学者のイアン・ハッキングによると、統計学とは、世の中が偶然の出来事で満ちていることを認めた上で「偶然を飼いならす」ための学問だ。賭け事、船が遭難する確率、都市部での地区ごとの死亡率、といったさまざまな偶然をなんとか取り押さえようとしたのだ。ハッキングは言う。

私は〈偶然の飼いならし〉について、つまりいかにして〈偶然〉あるいは規則的でない出来事が自然法則や社会法則の根底にはっきりと据えられるようになったのか、について書いている。〈偶然〉は、（中略）自然科学と社会科学の中心になった。

統計学は、たくさんのデータを集めて数学的な処理をすることで、出来事という本来偶然かつ個別的に生じるものから法則性を導き出す方法だ。これは学問の重要な成果だ。私たちの生活は、統計学によって偶然を統御することを抜きには成り立たない。一見すると無秩序な自然現象や社会現象のなかに法則性を見つけることで、例えば天気を予報したり、がんの予後や治療薬の効果、感染症の罹患率^{りかん}などの計算が可能になるのだ。統計学は偶然の出来事に正面から直面するのではなく、少し目をそらして外から眺めることで飼いならす。しかし、偶然との出会いから生まれる唯一無二の経験や説明を超えた変化を、統計学は考慮しない。

逆に言うと、統計学の発達は、私たちが日々直面する出来事とその経験が、意のままにはならない偶然に支配されているということを知らしめる。例えば、一生のあいだにがんになる確率は、男性で65%、女性で50%ほどだ。治療方法も治験を通して統計に基づいて効果が測られ、標準治療としてマニュアル化されている。

しかし、実際にがんになるということは、患者それぞれで意味は変わってくる。病とどのように出会うのかは人によって異なり、どのように受け止めるのか、病に対してどう応答してその後の生活を組み立てるのかは、本人の年齢や家族関係や社会関係によって大きく変わってくる。偶然の出来事に対しては、受け止める側の反応も個別的で多様なのだ。同じ診断名の病気であっても一人ひとりのストーリーは異なる。

① 偶然の出来事をめぐって一方では統計学を用いて飼いならそうとする方向性があり、

② 他方では偶然に満ちた人生にストーリーを与えて意味を探す方向性がある。

次に二人のがん患者の語りを引用する。

学さん 2回目（再発した時）に言われた時にも、じわあっとですけども、すごいショックですね。やはり仕事が手につかないというか。（中略）働いてたり、あるいは治療中は、そんな不安がないんですけどね。一人になってぼうっと考えていると、やはり不安になって、車の運転ができないような状態というか（中略）その帰り、途中に、やはりすごく不安になって、ちょっと、ちょっとこう、休憩したりする時に、やはりじわあっと不安がよぎるというか。^{※4}

Yさん 検査すればするほど、どんどん切る範囲が広がっていった。最終的には〔舌の〕3分の2かもっと切らないといけないうし、手術してみて、さらに切る範囲が広がるかもしれないみたいなことを言われて。で、ちょっとだいぶ絶望的な気持ちになってきましたね。sonだけ切ると、相当な後遺症が残るって、いろんな人の体験談とか見て〔知っていたので〕。（中略）

やっぱ自分にとって、ただ生き残るだけ、ってどうなのかなっていう（中略）ただ生きるだけじゃなくてね、生きてても、山ほどの後遺症を抱えながら暮らしてくっていくのは（中略）人を人たらしめるコミュニケーション的な機能とか、食事をする機能が損なわれてしまうっていうのは、相当苦痛だっていうので。^{※5}

学さんは再発の告知が死の接近を告げるがゆえに「一人になってぼうっと考えていると、やはり不安になって、車の運転ができないような状態」になっている。これに対してYさんの場合は「絶望的な気持ちになっ」た理由が死の予期ではなく「相当な後遺症」が残ることにあった。二人の告知に対する反応は大きく異なる。学さんの場合は死が目の前に見えてきて仕事が手につかなくなっているが、Yさんは予後が厳しい進行した舌癌であるにもかかわらず、死ではなく後遺症に注意が向いており、治療後のQOLを心配している。もちろん学さんが再発がんの告知でありYさんが初発のがんの告知であるという違いは大きいのだが、それにしても一人ひとりそのつど病の受け止め方が異なることがわかる。

病は本人にとっては偶然の出来事であり、そのつど自分自身にとっての意味づけを探さないとはいけない。自分なりの意味づけは、出来事から受けたショックを起点としてストーリーを作ること、つまり他の人もしくは自分に対して経験を語るることによってなされる。

統計はどのような確率でがん罹患するのか、といった統計的指標を与えてくれる

が、患者ごとに病の意味はそれぞれ異なる。それぞれ病をどのように受け止め、どのように病とともに暮らしていくのかは、自分で言葉にし、誰かに語ること（あるいは語らないことを選択すること）でしか意味づけられない。

偶然を言葉にしていく語りとは、言葉にしがたい理不尽な現実に対して、最低限納得のいく言葉と行為によって応答する営みだ。見出された言葉は場面に適合しないかもしれないし、違和感が残るかもしれないが、しかし語りきれないことがあること自体もまた経験の重さのしるしだ。経験を語り尽くすことはできない。しかし語ること
でしか経験は意味を持たない。このような緊張関係が経験と語りのあいだにはある。

経験の重さは言葉にならないものであり、それゆえに不完全にでも語ることを通して私たちは経験の生々しさに対して応答しようとする。不合理で意味を持たない現実に対して、かりそめにせよ意味を与えることで生き延びる試みが物語るという営みだ。即興の切実な語りを丁寧に分析していくとき、偶然の出来事を生き抜くその人固有の「形」がみえてくる。

<以下略>

注

※1 宮野真生子、磯野真穂『急に具合が悪くなる』晶文社、2019、28－29頁

※2 イアン・ハッキング『偶然を飼いならす——統計学と第二次科学革命』石原英樹・重田園江訳、木鐸社、1999、7－8頁

※3 九鬼周造『偶然性の問題』岩波文庫、2012

※4 川端愛『進行がんを患うひとが語る「死」』日本看護協会出版会、2023、17頁（原著者による強調は消した）

※5 日高直保「がんサバイバーの「揺れ」と変化に関する一検討——Aさんのライフヒストリーから」『年報人間科学』（大阪大学人間科学研究科）、2022：引用ではAさんをYさんに変更した。

村上 靖彦『客観性の落とし穴』（ちくまプリマー新書、2023年）より抜粋。
出題との関係で必要な補足、省略、変更を施している。なお、<中略>および<以下略>は出題者による。

2025年度入学試験 出題趣旨・解説・講評

【A日程：論文】

《出題趣旨》—————

一定の長さのある文章の論旨を理解し、指示された観点および字数でまとめ、表現する能力を試すものである。いずれも法曹にとって重要な基礎的能力である。

《解説・講評》—————

解答例

〔設問1〕

①は、たくさんのデータを集めて確率計算等の数学的な処理をすることにより、出来事という本来偶然かつ個別的に生じるものから法則性を導き出し、偶然を統御するという方向性である。一見すると無秩序な自然現象や社会現象のなかに法則性を見つけることで、例えば天気を予報したり、がんの予後や治療薬の効果、感染症の罹患率などの計算が可能になる。これに対し、②は、病気のような個人にとって偶然の出来事をどのように受け止めるかについて、自分で言葉にし、他人もしくは自分に対して語ることによって、不合理で意味を持たない現実に対して、かりそめにせよ意味を与えることを試みるという方向性である。(283字)

〔設問2〕

著者は、①について、統計学は学問の重要な成果であり、私たちの生活は、統計学によって偶然を統御すること抜きには成り立たないとして、その重要性を認めている。しかし、統計学は、例外、出会い、枝分かれ、そして、その根本にある原始偶然を説明することができない点に限界があると評価している。原始偶然とは、私がこのような仕方存在するという変えようのない事実のことである。例えば、医療の世界では、統計学的に病態を分析し、有効と認められた治療法を選択する「エビデンスに基づく医療」が絶対的な価値をもつが、がんになってしまった人が病をどのように受け止め、病とともに暮らしていくのかは、自分で言葉にし、他人もしくは自分に対して語ることではしか意味づけられない。このように、語ることによって偶然を保存し、経験の生々しさを示すことで偶然に満ちた人生に意味を与えようとする試みが②であると著者は評価している。したがって、著者は、①と②の関係について、一般的傾向を示すに過ぎない①によっては、個人にとって偶然の出来事が起こったことの意味を説明できないという限界があり、その限界を克服して、人生に意味を与える試みが②であると考えている。(502字)

解説・講評

〔設問 1〕

下線部①については、「統計学」および「飼いならす」がポイントなので、それぞれについて、問題文中から適切な説明を探してまとめるべきである（なお、「偶然」については、①と②の両方に共通するので、前提として冒頭で説明してもよい）。

「統計学」については、「たくさんのデータ」に基づくことと、「確率計算等の数学的処理」がポイントである。単に「データ」としている答案も多かったが、大量のデータがあつて初めて統計的処理が可能になるので、その点は指摘した方がよい。また、「確率」は、問題文で繰り返し用いられているキーワードなので、解答に盛り込んだ方がよい。

「飼いならす」については、「法則性を見つけ、偶然を統御する」がポイントである。説明問題で「飼いならす」のような比喩表現が用いられている場合は、比喩を用いない表現に言い換えるのが鉄則である。「(偶然を) 統御する」とか「統制する」といった語を問題文中から見つけて、用いるのがよい。「飼いならす」という表現をそのまま用いて、言い換えをしていない答案もあったが、それでは説明したことにならない。

下線部②については、「病気のような個人にとって偶然の出来事を受け止め」、「自分で言葉にし、他人もしくは自分に対して語ることににより」、「不合理で意味を持たない現実に対して、意味を与えることを試みる」がポイントである。①が大量のデータに基づく一般論であるのに対し、②は個人の受け止めであるというのが第1のポイントである。第2のポイントである「語る」は、問題文全体を通じて最も強調されているキーワードであり、これに触れていない答案は評価が大きく下がる。第3の「意味を与える」も重要である。「偶然に支配される生き方」等の答案もあったが、偶然に支配されるのではなく、自分で語ることににより偶然に意味を与えようとするという点が重要である。

〔設問 2〕

まず、著者は統計学によって偶然を統御することの重要性は認めているので、この点を指摘する必要がある。なお、「統計は事実に近い近似値ではなく事実そのものである」とする答案があつた。確かに問題文中にそのような記述はあるが、問題文全体の論旨からすると、これは、一般にそのように「受け取られてしまう」「感じられてしまう」という趣旨であつて、著者自身が積極的にそのように評価しているわけではないと解される（著者は、統計は個人にとっての事実を示すものではないと指摘している）。

その反面、統計学は、個人にとって偶然の持つ意味を説明できないという限界があると著者は評価している。このこととの関係で、偶然とは何かについて、問題文中に九鬼周造を引用して説明がされているので、ある程度答案に盛り込んでもよいと思われる。ただし、それを中心に据えてしまうと、問いに対する答えにならないおそれがある。

その上で、個人にとって偶然の出来事が起こったことの意味を明らかにするのが②の営みであると著者は評価している。問題文では病気・医療に関する例が多く挙げられているので、それも解答に盛り込むとよい。ただし、問題文に引用されている宮野真生子などの例のみに重点を置いてしまうと、問いに対する答えとしてバランスを欠くおそれがあるので、注意してほしい。

以上のことから、①と②の関係は、①の限界に対して②によって対処するものともいえるし、また、偶然に対して異なる観点から対処するもの（①は一般的傾向を示すものであるのに対し、②は個人にと

っての受け止めを示すものである等)ともいえよう。解答は一義的ではなく、問題文の論旨を踏まえた説明がなされていれば評価されるが、①と②を正反対の相容れない立場であるとするのは、問題文の論旨を正しく理解していないと評価される。

アドバイスとして、問いとして「著者は・・①および②を、それぞれどのように評価しているか、また、両者はどのような関係にあると考えているか」と聞かれているのだから、解答の構成としても、①、②、両者の関係という最低3つに分けて書くべきである。関係性が①と②に組み込まれてしまい、明確に書かれていない解答は評価が低くなった。また、限られたスペースに問題文の中から多くの文章を抜き出して羅列することは、文意を理解し消化できていない証拠として、かえって評価を下げることに注意されたい。

以 上